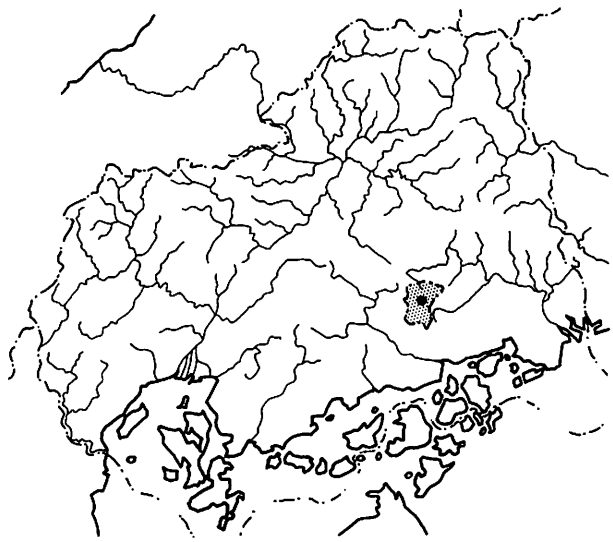
広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第172集

大将軍遺跡発掘調査報告

1998

財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

大将軍遺跡発掘調査報告



1998

財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1．本書は，1997（平成９）年度に実施した，担い手育成基盤整備事業（和草（わそう）地区）に係る，大将軍（だいしょうぐん）遺跡の発掘調査報告である。

2．発掘調査は，広島県尾道農林事務所と広島県教育委員会から委託を受け，財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3．発掘調査は，鍜治益生，河村靖宏が実施した。

4．出土遺物の整理，復元，実測は三枝健二が担当した。

5．出土遺物の写真撮影は，河村が担当した。

6．本書の執筆はⅠ～Ⅳ，Ⅵ－(1)を鍜治が，Ⅴ，Ⅵ－(2)を三枝が担当し，三枝が編集した。

7．遺物の縮尺は，全て1/3に統一した。

8．図版と挿図の遺物番号は同一である。

9．本書に使用した方位は，第１図のほかは全て磁北である。

10．第１図は，国土地理院発行の１：25,000（甲山）を使用した。

目　　次

Ⅰ　はじめに……(1)

Ⅱ　位置と環境……(2)

Ⅲ　調査の概要……(4)

Ⅳ　検出の遺構……(6)

Ⅴ　出土の遺物……(10)

Ⅵ　まとめ……(13)

挿図目次

第1図　位置図（1：25,000）……(2)
第2図　遺跡周辺地形図（1：10,000）……(4)
第3図　遺構配置図（1：200）……(5)
第4図　ＳＢ１，ＳＤ１・２実測図（1：60）……(7)
第5図　ＳＸ１～４実測図（1：60）……(9)
第6図　出土遺物実測図（1：3）……(11)

図版目次

図版１ａ　遺跡遠景空中写真（南から）
　　ｂ　遺跡近景（東から）
　　ｃ　調査区全景空中写真（南から）
図版２ａ　遺構検出状況（北から）
　　ｂ　遺構完掘状況（同上）
　　ｃ　ＳＢ１検出状況（南から）
図版３ａ　ＳＢ１遺物出土状況（東から）
　　ｂ　ＳＤ１完掘状況（南から）
　　ｃ　ＳＤ２完掘状況（東南から）
図版４ａ　ＳＸ１完掘状況（南から）
　　ｂ　ＳＸ３完掘状況（南から）
　　ｃ　ＳＸ５遺物出土状況（東から）
図版５　出土遺物

Ⅰ はじめに

大将軍遺跡の発掘調査は，担い手育成基盤整備事業（和草地区）に係るものである。

本事業は，ほ場整備を契機として営農組織を強化し，農業機械の効率的利用，良質米の生産，地域に適した転作作物の選定，栽培面積の拡大を行うとともに，農用地の集積によって担い手農家の育成を図る目的で実施されるものである。

広島県尾道農林事務所（以下，「尾道農林」という。）は，1995（平成７）年５月広島県教育委員会（以下，「県教委」という。）と事業計画予定地内における文化財等の有無及び取扱いについて協議を行った。これを受けて県教委と久井町教育委員会（以下，「町教委」という。）は現地踏査を実施し，同年10月に試掘調査が必要な箇所が６か所ある旨を回答した。また，同年11・12月にかけて試掘調査を実施し，大将軍遺跡（ 640㎡）を確認した。

これを受けて県教委・町教委と尾道農林は協議を重ねたが，計画変更等による現状変更が困難であるとの結論に達し，事前の発掘調査を行うこととなった。発掘調査に伴う経費は，文化庁長官と農林省構造改善局との覚書「文化財保護法の一部改正に関する覚書」５項に基づき，事業者負担分（82.5％）を尾道農林が，農家負担分（17.5％）を県教委が負担することとなり，1997年１月尾道農林と県教委は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下，「センター」という。）に発掘調査の依頼を行った。これに基づいてセンターは，同年４月尾道農林及び県教委との間で委託契約を締結し，５月19日から６月27日まで発掘調査を実施した。また，７月26日には久井町教育委員会との共催で報告会を開催し，約50名の参加者があった。

本報告書は，このような経過で実施した発掘調査の成果を取りまとめたものであり，この地域の歴史研究の一助となれば幸いである。

なお，発掘調査に当たっては，広島県尾道農林事務所，久井町教育委員会，久井町土地開発課，財団法人広島県農業開発公社，地権者及び地元の方々から多大な御協力をいただいた。末筆ながら記して謝意を表したい。

Ⅱ 位置と環境

大将軍遺跡は，御調郡久井町和草に所在する。久井町は県南東部に位置し，芦田川水系の御調川や，沼田川水系の仏通寺川などの上流域にあたる。また，地形的には世羅台地の南端部に位置することから，多くの盆地状の平坦面や低丘陵面が形成されている。

本遺跡の前面には御調川の支流である泉川が東西方向に流れ，周辺地形は耕作面からの比高差があまりない丘陵が展開している。

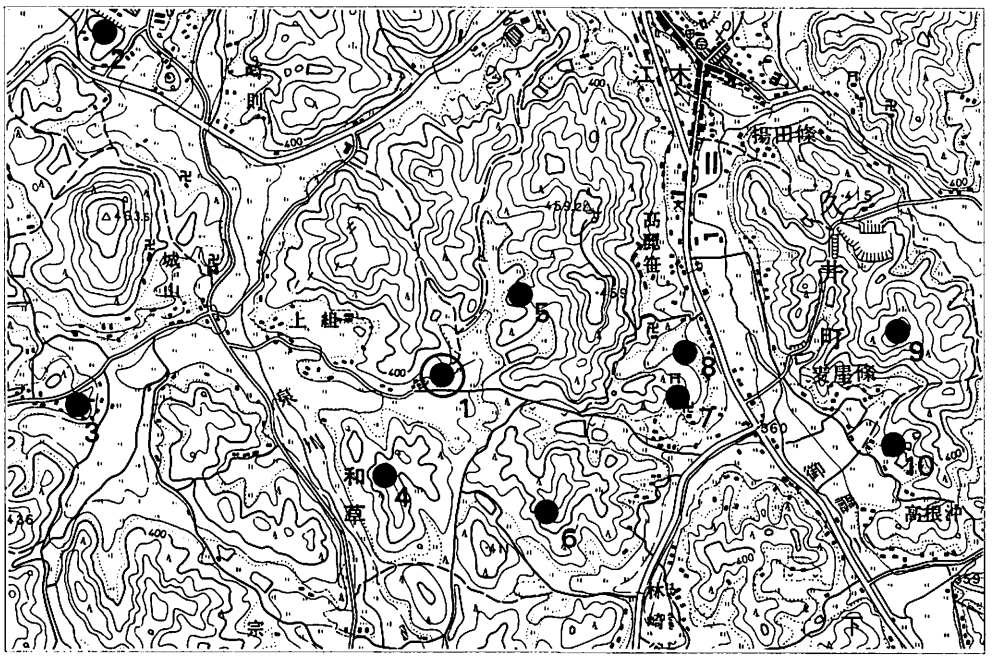
次に町内の遺跡を概観してみたい。

旧石器時代・縄文時代

町内北端部の莇原で調査が行われた莇原垣内遺跡[1]では，遺構検出面から流紋岩製などのナイフ形石器及び剥片が出土している。また，土取の清盛塚周辺で縄文時代後期の土器片が採集されている。ともに遺跡も遺構に伴わないことから遺跡の内容等については明確ではない。

弥生時代

発掘調査が行われた遺跡としては羽倉の虚空蔵遺跡[2]があり，竪穴住居跡１軒，溝状遺構などを検出した。住居跡は調査区内で一部を検出したものであるが，焼土などの存在から焼失家屋と推定されている。直接住居跡から出土したものではないが，弥生時代中期頃の土器が出土しており，同時期頃の遺跡と考えられている。また，蓮光寺谷遺跡では試掘調査によって円形の竪穴住居跡２軒を検出しているが，時期等については明確ではない。



1　大将軍遺跡
2　滑城跡
3　青木城跡
4　四十舟古墳群
5　長谷古墳
6　柏木古墳
7　陶八幡城跡
8　城跡（土居屋敷跡）
9　上田城跡
10　高根城跡

第１図　位置図（１：25,000）

古墳時代

町内で数十基の古墳が確認されている。その大半は埋葬施設が横穴式石室である。本遺跡周辺部においても谷を挟んで南側の丘陵上には四十舟古墳群や柏木古墳が存在する。和草地区東側の江木地区の大塚古墳は，全長約７mの片袖式の横穴式石室をもつ古墳で，本地域においては大型の石室である。

古代

古代の遺跡としては，奈良・平安時代に操業していたと考えられる御調古窯跡群の一部が町域の南半部に存在し，このうち当センターでは小林の小林第１号窯[3]や熊ヶ迫窯跡群[4]などを発掘調査している。小林第１号窯跡は地下式の登窯で，９回以上の操業時期が確認され，須恵器の杯蓋，杯身など多くの遺物を検出した。

一方，熊ヶ迫窯跡群は５基の窯跡からなり，第１～３号窯跡の発掘調査を実施した。いずれも地下式の登窯で，出土した須恵器から８～11世紀頃にかけて，ほぼ継続的に操業された窯跡群であることが判明した。

また，窯跡から出土した須恵器には府中市の備後国府跡に比定されている府中市街地遺跡群，三次市の下本谷遺跡，東広島市の安芸国分尼寺跡出土のものなどに形態的に類似したものがあることが指摘されている。

中世

中世の遺跡としては町内で十数か所の城跡などの存在が知られている。このうち和草地区周辺の遺跡としては，青木城跡[5]や陶八幡城跡[6]が知られている。青木城跡は４か所の郭のほか，土塁等が確認されている。また，陶八幡城跡は最高所の郭が著しく改変されており，現状では段や土塁が確認されている。

発掘調査された遺跡としては羽倉の羽倉城跡[7]がある。部分的な調査のため，遺跡の全容は明確にできないが，土塁や溝状の落ち込みを確認している。

また，土取の古土井遺跡[8]では溝状の遺構や柱穴を検出し，永楽通宝や備前焼の擂鉢が出土しており，遺構の性格は不明であるが，室町時代後半頃と考えられている。

註

(1) 久井町教育委員会『久井町文化財報告書　羽倉城跡・莇原垣内遺跡』1995年
(2) 久井町教育委員会『虚空蔵遺跡』1990年
(3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『小林１号窯跡発掘調査報告』1984年
(4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『熊ヶ迫１～３号窯跡』1996年
(5) 広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第３集　1995年
(6) 註(5)に同じ
(7) 註(1)に同じ
(8) 久井町教育委員会『古土井遺跡』1991年

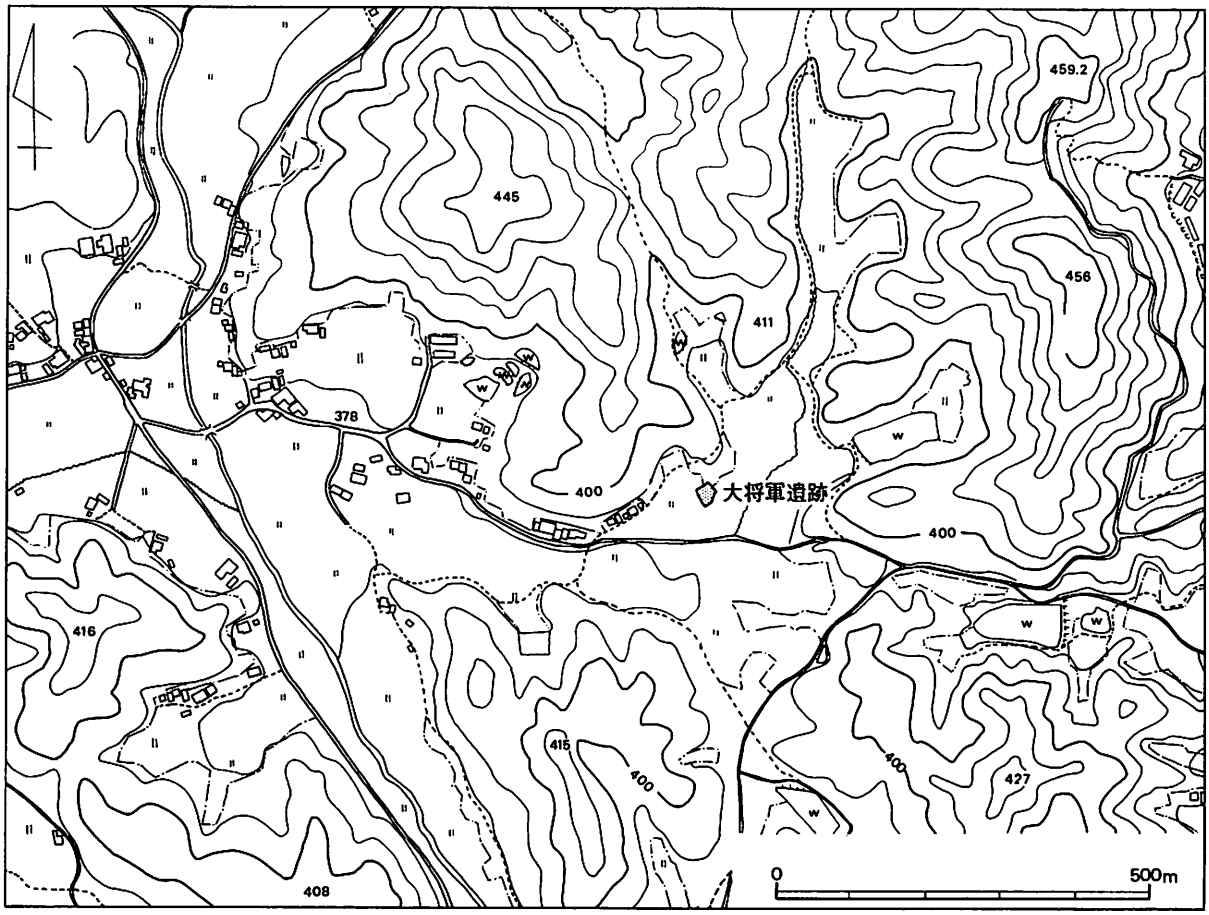
Ⅲ 調査の概要

遺跡の現況は水田で，遺跡の南側を流れる河川との標高差は約６ｍである。遺跡の北半部は，水田面成形の際に丘陵頂部が広範囲に掘削されていた。

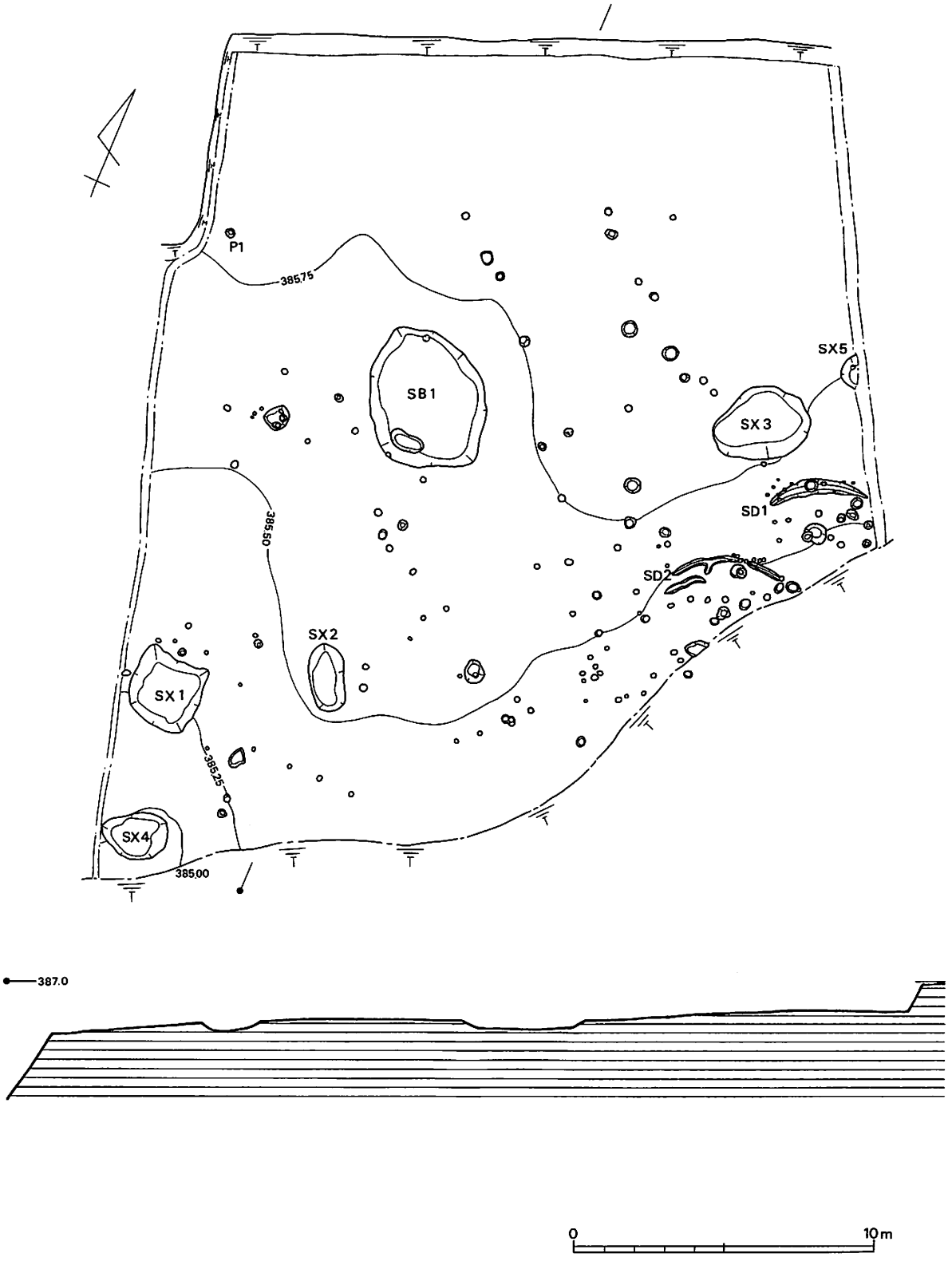
現況で確認した遺構は，調査区の中央付近から丘陵先端方向にかけての部分である。調査区中央付近では，耕作土または床土直下の黄褐色粘質土で遺構を確認したが，南側丘陵先端方向にかけては検出面がやや傾斜しており，部分的には耕作土下に厚さ約20～30cmの暗褐色粘質土の包含層の堆積が認められた。

今回の調査で確認した遺構は，平面形が不整形な住居状の遺構（ＳＢ１），丘陵北側にかけて短く弧状を呈する溝状遺構（ＳＤ１・２），平面形が不整形な性格不明の土壙（ＳＸ１～５）及び多数の柱穴等である。

出土した遺物は少なく，遺構に伴って出土した遺物は前述のＳＸ１・５から土師質土器が少量出土したほか，包含層に伴ってわずかな土器類がある。また，ＳＢ１からは研磨及び敲打具などと考えられる石材が出土した。



第２図　遺跡周辺地形図（１：10,000）（アミ目が調査区）



第３図　遺構配置図（１：200）

Ⅳ 検出の遺構

住居状遺構（ＳＢ１）（第４図，図版２ｃ～３ａ）

調査区のほぼ中央付近で確認した平面形が不整形な遺構である。上端規模は，長軸方向が約4.5m，短軸方向が約 3.9m，深さは中央部で検出面から22cmである。床面はほぼ平坦で，南側隅が長さ約 1.2m，幅約50cm，深さ約10cmの範囲で長円形にくぼむ。床面には柱穴等は検出できなかった。また，壁面は床面から緩やかにカーブして立ち上がるが，壁際には壁溝等の施設は認められなかった。

遺構内からは少量の土器片が出土したが，時期を特定できるものはない。床面の中央付近から研磨面をもち熱を受けて赤変した礫やススが付着した礫などが出土した。

溝状遺構

ＳＤ１（第４図，図版３ｂ）

調査区南東側隅で検出した溝状の遺構で，東側に近接してＳＤ２が位置する。南側は後世の削平のため失われており，全体の規模や形状については不明であるが，現況での規模は長さ約3.5m，最大幅約20cm，深さ約10cmで，緩やかに弧状を呈する。ＳＤ１については，弧状の内側に多数の柱穴を検出したものの，柱穴の径や深さなどに統一性がないほか，配列についても規則性がみられない。竪穴住居に伴う壁溝の可能性を想定することは困難である。

なお，ＳＤ１の南西端部の南側にはＳＤ１に平行する状態で短い溝状の浅い掘り込みが認められたが，本遺構に伴うものかは明らかではない。

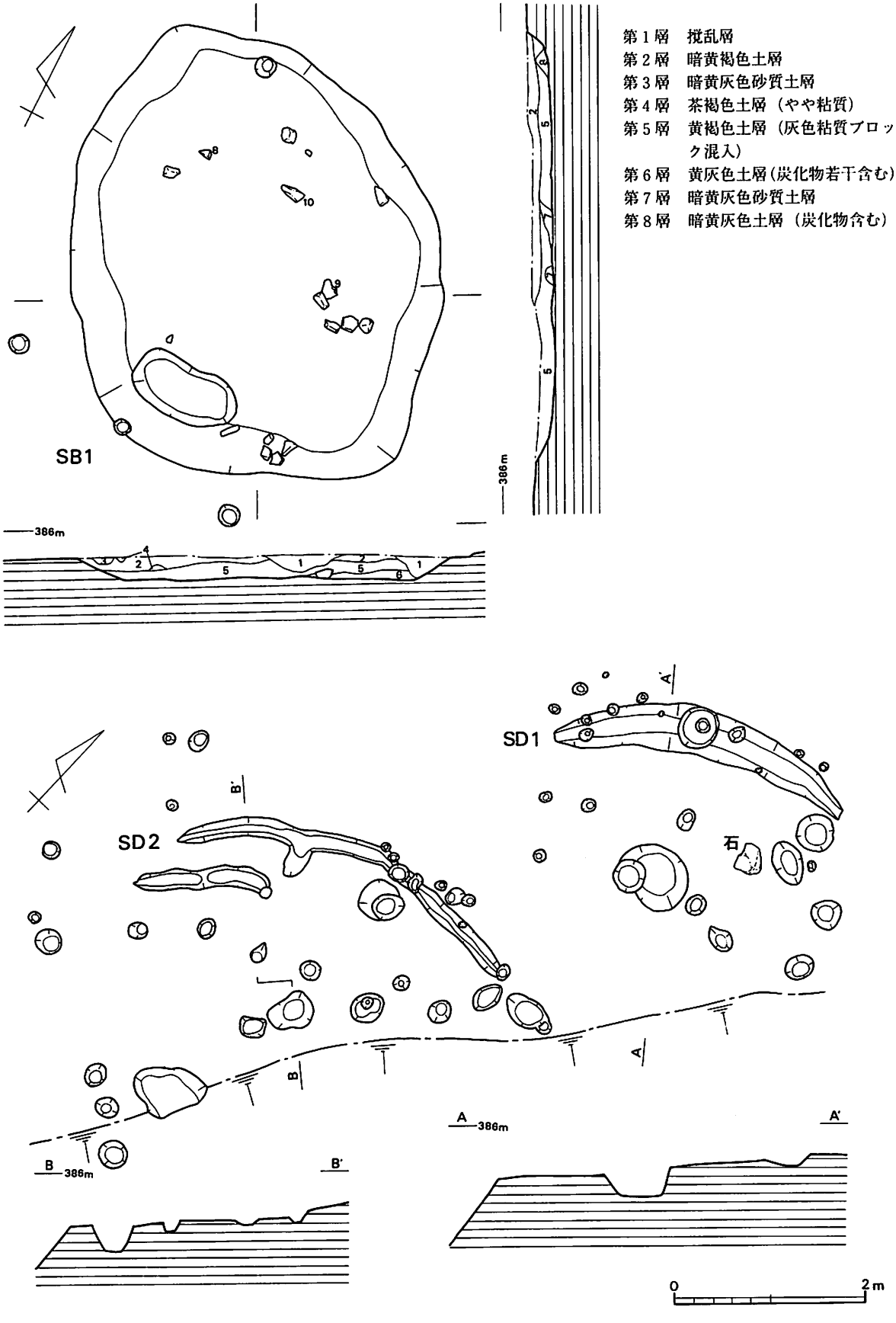
ＳＤ１に直接伴った遺物はないが，周辺部の遺物包含層から若干の土師質土器が出土した。

ＳＤ２（第４図，図版３ｃ）

ＳＤ１の東側に近接した位置で検出した溝状の遺構で，ＳＤ１同様に南側に向けて弧状を呈するが，南半部は後世の撹乱のため流失しており，全体規模は不明である。現況での規模は，長さ約 3.2m，最大幅約50cm，深さ約10cmである。

ＳＤ２の弧状の内側には，ＳＤ１同様多数の柱穴を検出したが，両者の間に関連性は認められなかった。

遺構検出面上層の包含層から若干の土器片が出土したが，小片であるため器種や時期を特定することは困難である。



第4図　ＳＢ１，ＳＤ１・２実測図（１：60）

性格不明の遺構

ＳＸ１（第５図，図版４ａ）

調査区西辺の南隅付近で検出した土壙で，ＳＸ３の北側約３m離れた位置にある。平面形は不整形な方形で，上端規模は一辺約 2.3m，深さは約10cmである。底面は東西方向ではほぼ平坦であるが，丘陵先端方向の南側に向けて傾斜して下がっている。底面は上端同様に方形を呈し，一辺約 1.8mである。壁面は底面から緩やかに立ち上がっている。

出土した遺物としては，底面に密着した状況で土師質土器の土鍋片がある。

ＳＸ２（第５図）

ＳＸ１の東側約４mで検出した土壙である。平面形は楕円形で，上端規模は約 2.2m× 1.3m，深さは約10cmの土壙である。底面はほぼ平坦で，平面形は上端同様に楕円形で，規模は約1.8m×0.8mある。壁面は底面から緩やかにカーブして立ち上がる。また，底面北西隅で径約10cm，深さ約３cmの小柱穴を検出した。土壙内からは，遺物は出土していない。

ＳＸ３（第５図，図版４ｂ）

調査区東辺部で検出した土壙である。本土壙はＳＸ５の西側約２mに位置する。平面形は不整形な楕円形で，上端規模は約 3.3m×約 2.5m，深さは約20cmである。また，底面の平面形は不整形な楕円形で，規模は３m×1.7mである。底面はほぼ平坦である。

壁面は底面から緩やかにカーブして，立ち上がっている。

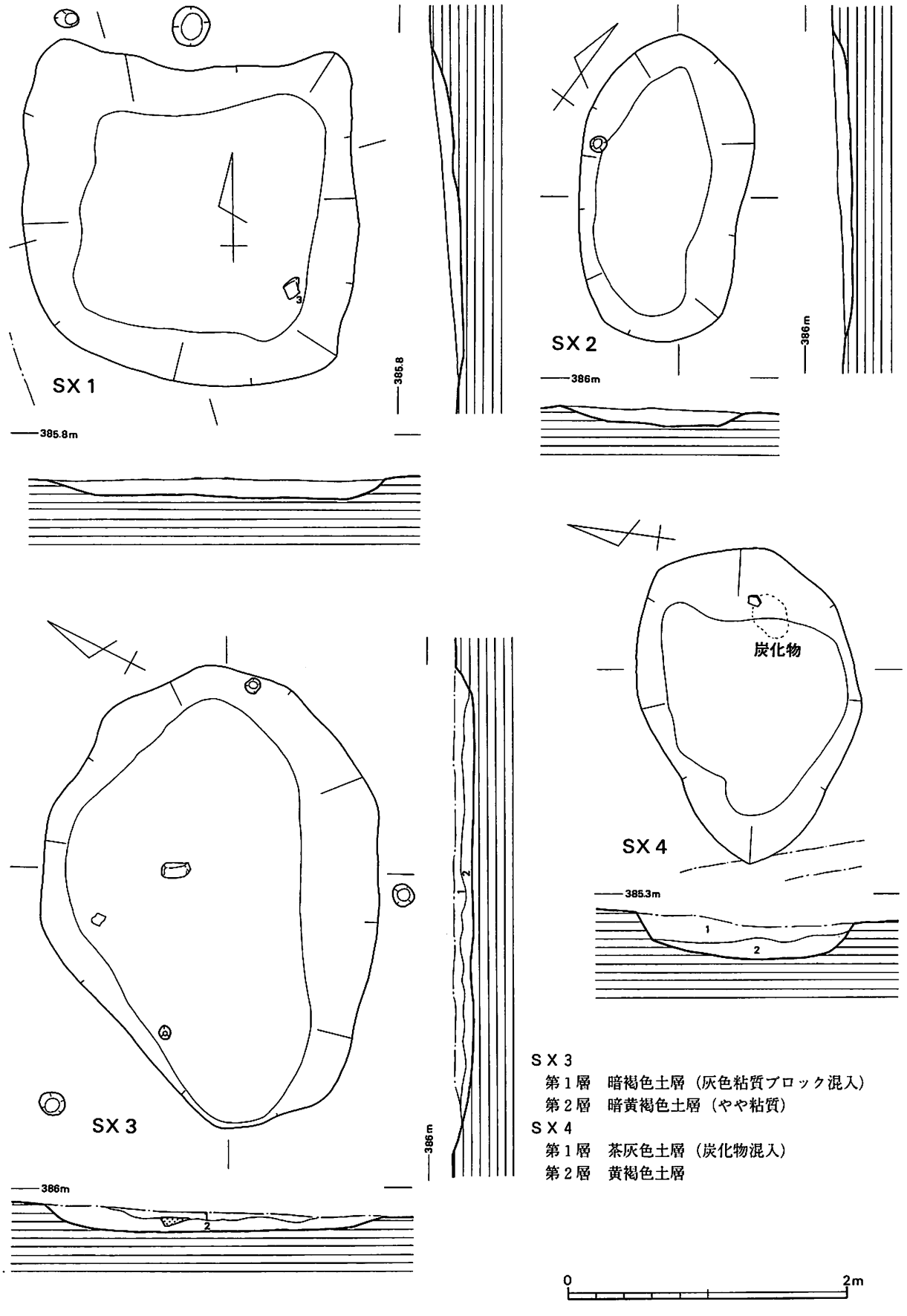
土壙内から自然礫等は出土したものの，遺物は出土していない。

ＳＸ４（第５図）

調査区南西隅で検出した土壙である。平面形は不整形な楕円形で，上端規模は約2.3m×1.6m，深さは約30cmである。底面の平面形も上端平面形同様不整形な楕円形で，規模は約1.4m×1.2mであり，底面中央がややくぼむ。また，壁面は底面から緩やかにカーブして立ち上がっている。底面の北側中央から壁面にかけて40cm×20cmの楕円形の範囲に炭化物が広がる部分を検出した。遺物としては図示できなかったものの，土師質土器片が出土した。

ＳＸ５（図版４ｃ）

調査区東辺部のほぼ中央付近で検出した土壙で，遺構の東側半分は調査区外に延びているため，全体的な形状や規模は明確ではないが，現状から，ほぼ円形の土壙と考えられる。現況の上端規模は長軸方向で約90cm，深さ約20cmで，断面は浅いＵ字形である。覆土中から土師質土器の土鍋片が出土した。



第5図　SX1～4実測図（1：40）（アミ目は石）

V 出土の遺物

各遺構から土師質土器類，石製品類などが出土した。これに包含層の遺物を含めて，その概要を記す。

土器類（第６図，図版５）

１は，調査区中央部のＰ－１から出土したほぼ完形の土師質土器の皿で，底径7.25㎝，器高3.4㎝を測る。口縁部及び底部は歪んでおり，平底の底部から直線的に外反し，端部は丸くおさめる。風化のため底部の切り離し痕跡は確認できない。胎土はきめが細かく，くすんだ明橙褐色を呈し，焼成はあまい。

２は，ＳＸ１から出土した土師質土器の土鍋口縁部である。体部内面に稜をもち，直線的に外反する口縁端部に面を有する。外面には成形時の押圧痕を，また内面には比較的丁寧なナデ調整を施している。胎土に砂粒が目立ち，くすんだ暗灰褐色を呈している。

３は，南端部の包含層から出土した須恵質の擂鉢口縁部である。口縁端部の面に横ナデを加え，緩やかな段となっている。外面には成形時の痕跡をとどめ，内外面とも粗くナデている。胎土はきめが細かだが砂粒が目立ち，明乳灰褐色を呈し風化している。

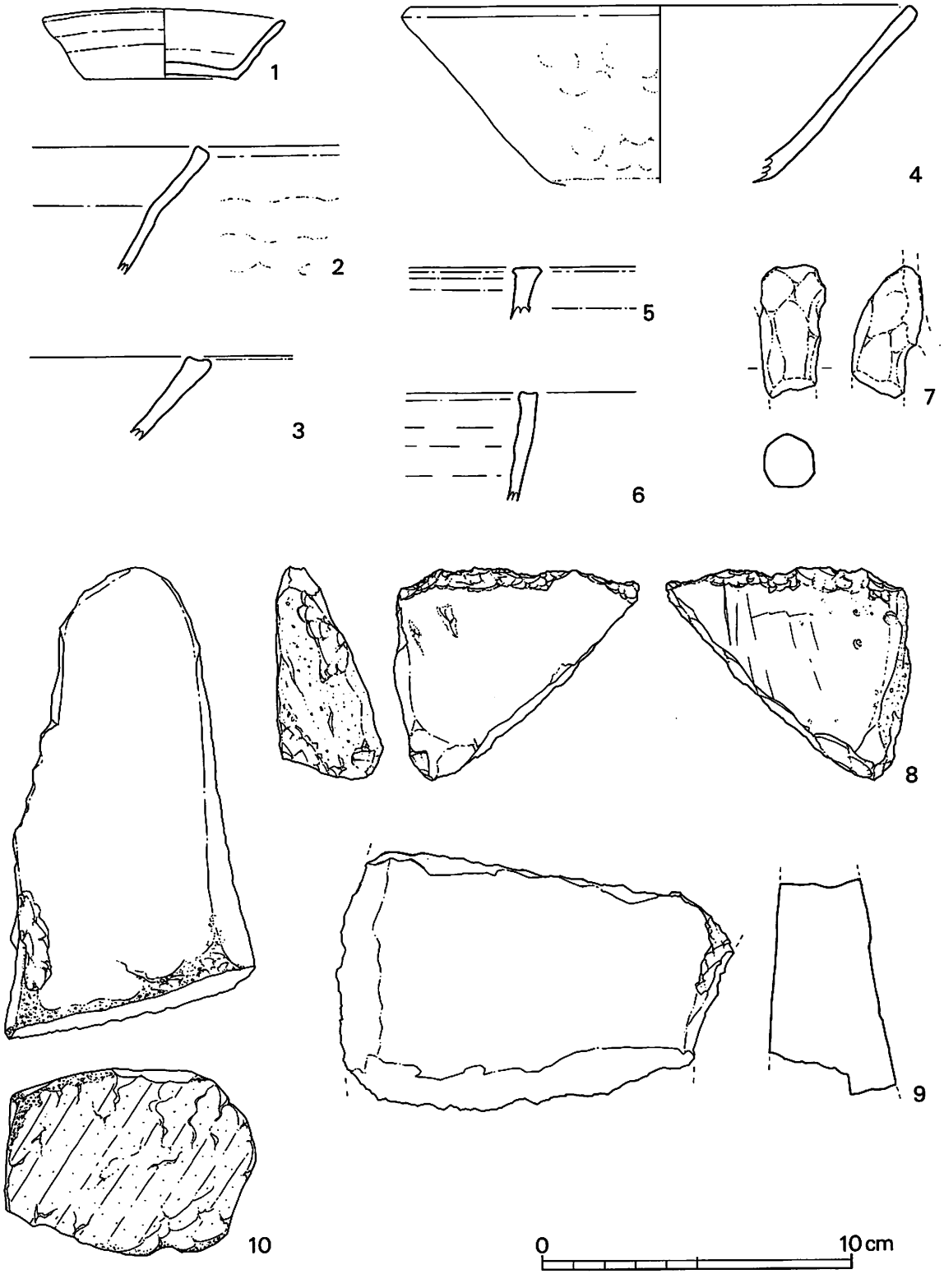
４は，ＳＸ５から出土した約1/4片の土師質土器の土鍋で，復元口径は24.2㎝を測り，器高は約９㎝である。不安定な平底から直線的に外反し，口縁端部に面をもつ。やや薄手で，外面には成形時の押圧痕をとどめ，内面は比較的丁寧なナデ調整を施している。胎土は砂粒を多く含み，くすんだ赤褐色を呈し，全体に風化している。

５・６は，ともに調査区東部の包含層から出土した陶器質の鉢の口縁部と考えられる。５は，外面がやや外反気味に直立し，端部に平坦面を有する。内面に細かな刷毛目が残る。胎土は緻密で焼成も良好で，明赤褐色を呈する。６の外面は平滑で，内面は横ナデによる平行な緩やかな段が残り，口縁端部に面を有する。胎土・焼成とも良好で，明赤褐色を呈している。

７は，調査区東南部の包含層から出土した土師質土器の土鍋の脚部である。多角柱状に成形し，差込みにより接合している。胎土はきめが細かいが，焼成があまく風化している。色調は明るい淡褐色を呈している。

石製品類（第６図，図版５）

８は，ＳＢ１から出土したもので，最大長 10.3㎝，最大幅 11.3㎝，最大厚5.15㎝，重量566ｇを測る。岩石質の流紋岩系の円礫を素材とする。表裏面に，主に一方向の擦痕をとどめる研磨面が残され，一辺に剝離痕が集中している。この研磨面は，稜部の潰れなどから加工痕ではなく，使用によるものと考えられる。また，斜めの剝離面は研磨面を切っていることから，破損後に敲打具へ転用したものと考えられる。



第6図　出土遺物実測図（1：3）

9は，ＳＢ１から出土したもので，最大長 19.25cm，最大幅 12.6cm，最大厚6.2cm，重量2,140ｇを測る。粗い岩石質の流紋岩系の石材を使用しており，表裏に平坦な剝離面を有する。研磨面は一方向の面のみが使われ，両側辺は大きく破損している。研磨の状況はやや粗く，節理面を使用したものと思われる。一部に被熱による赤変がみられ，その周辺に薄くススが付着している。

10は，ＳＢ１床面から出土したもので，最大長 22.9cm， 12cm，9.7cm，重量3,066ｇを測る。粗い岩石質の流紋岩系の円礫を用いており，一辺に剝離面を有する。剝離面の稜部周辺と礫の稜部の一辺には，敲打痕が密集している。重量からみて，台石も兼ねた敲打具と考えられる。

Ⅵ　ま　と　め

(1)　検出の遺構について

今回の調査では，住居状の遺構１軒（ＳＢ１），溝状遺構２条（ＳＤ１・２），性格不明の土壙５基（ＳＸ１～５），その他多数の柱穴を確認した。

ＳＢ１は，今回検出した遺構のなかではもっとも大型ではあるが，床面に柱穴などの施設をもたないことや断面が浅い皿状を呈するなど一般的な住居とはいいがたい。しかし，床面に密着した状況で砥石や被熱変成のみられる礫やススの付着した礫等を検出しており，何らかの作業場的機能を有していたものと推定されよう。

２条の溝状遺構については，ともに丘陵斜面下側にかけて緩やかに弧を描くもので，周辺部の削平が著しく残りの状況はよくない。また，遺構の周辺部で多数の柱穴を検出した。その対応関係については明確ではないが，何らかの建物の存在が考えられる。また，本遺構に伴う遺物としては，遺構確認面より上層の包含層から土師質土器等が出土したが，細片が多い。

５基の土壙については，その形状や規模ともに不整形なものや小型のものが多く，その性格については今後の検討が必要である。

調査区南半部を中心にして検出した柱穴については，配列状況や対応関係について明らかなものは少ないが，中世の住居跡には柱の配置が必ずしも規則的でないものも存在するので，本遺跡においてもいくつかの住居等が存在したことも想定できよう。

(2)　出土の遺物について

出土遺物は土師質土器の皿，鍋類などに限られる。皿については，口径及び形態などから，概ね草戸千軒町遺跡第Ⅱ期頃に相当し，14世紀前後の時期が考えられよう。また，鍋，擂鉢類の特徴からも14・15世紀前後の時期が考えられる。なお，一部に近世のものもみられる。

次にＳＢ１出土の石製品類については，研磨及び敲打を目的とした用途が考えられる。報告したもの以外にも数点の自然礫や分割礫が出土している。これらの多くには被熱痕やススの付着痕が確認され，石製品とともに遺構の性格をある程度類推する手がかりとなる。

以上のように，今回検出した遺構については，調査区内から出土した遺物等から，主として14・15世紀頃のものと考えられる。本遺跡を含めた周辺地域には，中世後半期の集落が存在していた可能性が考えられ，本遺跡はその一部であったことが想定される。

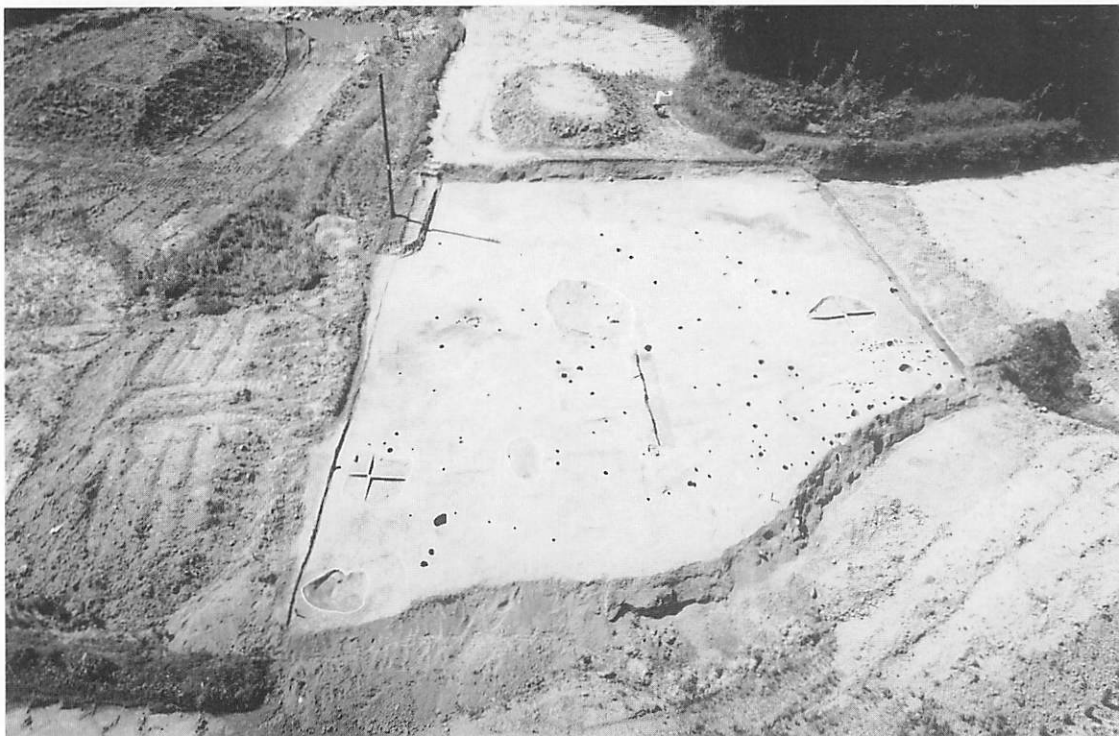
註

(1)　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書』Ⅱ　1994年

図版1

a．遺跡遠景空中写真
（南から）

b．遺跡近景
（東から）

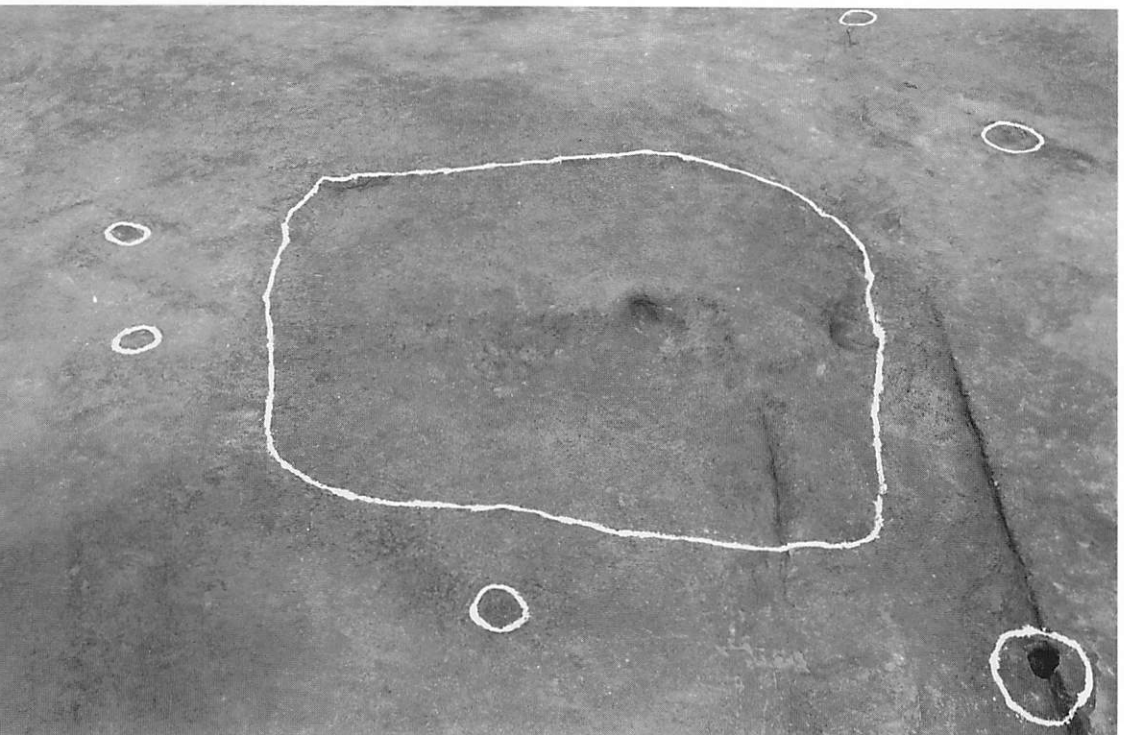


c．調査区全景
空中写真
（南から）

図版 2

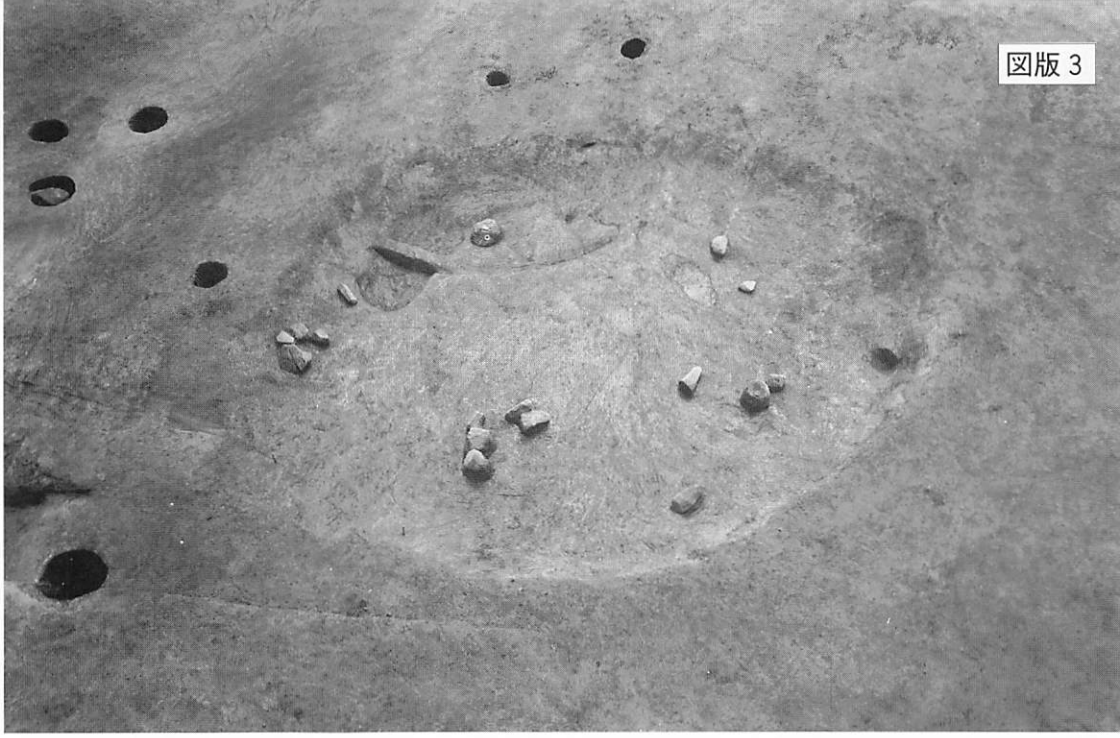
a．遺構検出状況
（北から）

b．遺構完掘状況
（同上）



c．SB 1 検出状況
（南から）

図版 3



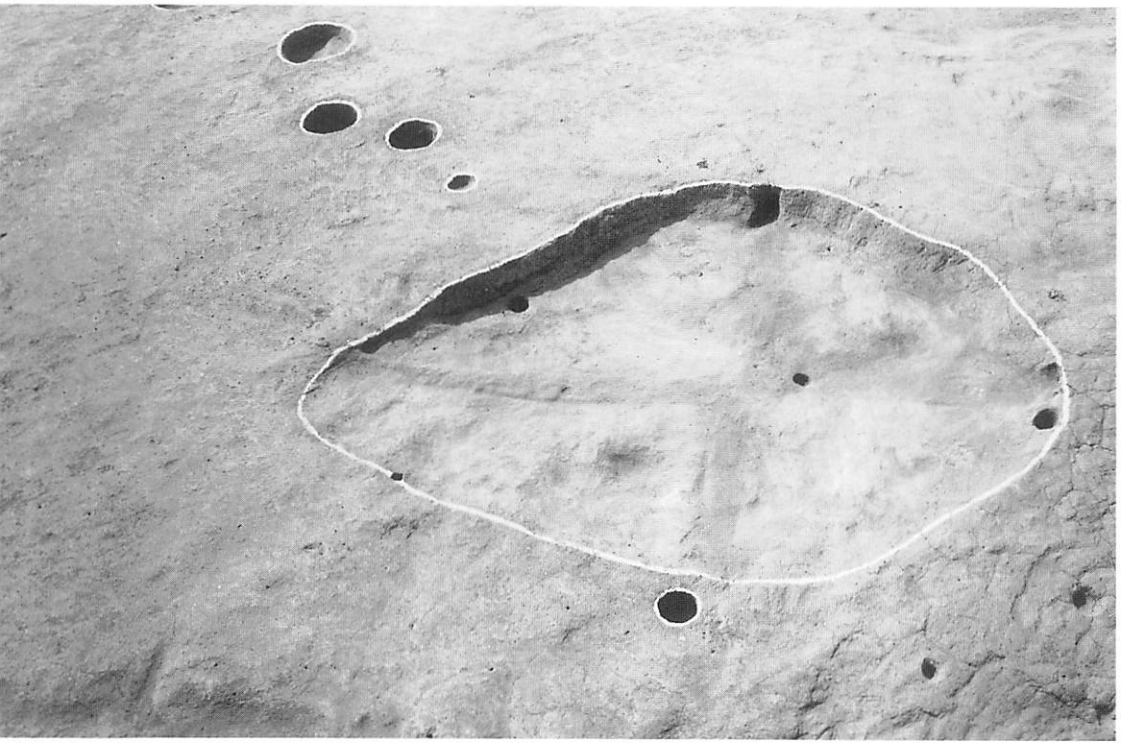
a．SB 1 遺物
出土状況
（東から）

b．SD 1 完掘状況
（南から）

c．SD 2 完掘状況
（東南から）

図版 4

a．SX 1 完掘状況
（南から）



b．SX 3 完掘状況
（南から）

c．SX 5 遺物出土状況
（東から）

出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	だいしょうぐんいせきはっくつちょうさほうこく
書名	大将軍遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第172集
編著者名	鍜治益生，三枝健二
機関名	財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大将軍遺跡 (だいしょうぐんいせき)	広島県御調郡久井町和草 (ひろしまけんみつぎぐんくいちょうわそう)	34442	8	34° 31′ 40″	133° 01′ 54″	19970519 ～ 19970627	640㎡	担い手育成基盤整備事業（和草地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大将軍遺跡	集落	室町時代	竪穴住居状遺構１，溝状遺構２，性格不明の遺構５	土師質土器鍋・皿，石製敲打具，砥石	

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第172集

大将軍遺跡発掘調査報告

発 行 日　1998（平成10）年３月31日

編集・発行　財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目８番49号

TEL（082）２９５－５７５１

印　　刷　電子印刷株式会社